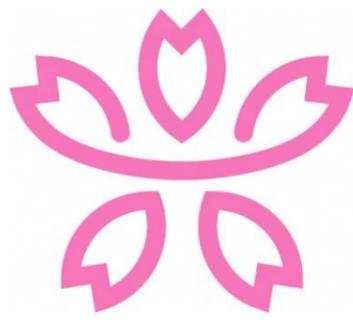


大手前新聞

創刊
2018年(平成30年)
佐伯市役所
大手前開発推進室
☎0972-22-4623

さいき城山桜ホール シンボルマーク 決まる！



全国38都道府県の7歳〜87歳の皆様から寄せられた533点の作品の中から右のとおり決定しました。

このマークは、桜の花をモチーフに制作し、桜の花の精が両手を広げ、多くの人に文化・芸術・情報発信の拠点としての「さいき城山桜ホール」の良さをアピールして、参加、利用を呼び掛けていきます(作成者)。



前号でお伝えしていたとおり、選考委員会は、3月13日に選考結果を田中市長に報告し、市長は、その場で採用を決めました。

【選考委員会の講評】

マークの印象は、桜の花びらをつなげることで擬人化され、「ホールに集う人の喜び」「両手を広げホールに迎え入れる人」をイメージすることができ、同ホールが目指す「様々な人々が交流する拠点」等の実現ということが表現されていると考えられる。

シンブルなデザインの中にウィットと造形性が光る完成度の高い作品である。



さいき城山桜ホール

SAIKI SHIROYAMA SAKURA HALL

※文字入れの例



感謝状・賞品の贈呈

名称とシンボルマーク

3月22日、さいき城山桜ホール名称及びシンボルマーク作成者への感謝状及び賞品贈呈式を行いました。
シンボルマークの作成者、江部幸夫さん(名古屋市)の御出席はございませんでしたが、名称の作成者、阿部裕子さん(佐伯市・写真上段)と宮脇将弘さん(大分市・写真下段)に田中市長から感謝状と賞品を贈呈しました。

佐伯がいちばん！

今回の名称とシンボルマークの選考委員を務めさせていただき、佐伯の人々のホールにかけられる期待や故郷に寄せられる思いの深さに感銘を受けました。応募された方々の名称の意味や理由を讀みますと大手前への愛着や歴史への思い、交流への期待が一つひとつの言葉から伝わってきました。そして、選考委員で検討した結果、5つの名称候補に絞り込み、市内の中・高校生に投票という方法で意見を聴くことにし、その結果は、カタカナ語を冠した他の4作品を押さえ「さいき城山桜ホール」の得票数が最多でした。

これまで広告やデザインを専門としてきた私にはこの結果は驚きでした。若い中・高校生はもっと英語に近い響きの名称を選ぶと想像していたからです。しかし、改めて考えますと、とても堂々として美しい名前だということがよく分かりました。ノーベル賞授賞式の和服の本庶さんのようにお洒落な印象すら受けます。

ある選考委員と「子どもたちに教えられるね」と言葉を交わしました。市長への選考結果報告日の朝刊の「ひと」欄に、佐伯鶴城高校の生徒が載っていました。全国高校生読書体験記の大分県選考会で優秀賞を受賞したのです。この彼のような若者が今回のホールの名称を選び、佐伯の未来を考えていくのだと確信しました。

決定したシンボルマークは、ホールと人々のつながりを表すように桜の花びらが大きく両手を広げた人間の姿になっており、ホールに集う人々の喜びを力いっぱい表現しています。



大手前まちづくり交流館(仮称)名称及びシンボルマーク選考委員会

委員長 根之木 英二

いよいよ地上へ

平成30年6月に着手した「さいき城山桜ホール」の建設現場は、地下部分の工事が進む中、1階の小ホール部分の躯体工事が地上に姿を見せ始めました。



建設現場の様子

開館準備検討会議発足



3月26日、さいき城山桜ホールの開館に向け検討すべき事項に関し、意見や助言を頂く外部有識者会議の第1回目の会議を開催しました。同会議議長には、福岡大学の柴田教授が選出されました。



昭和46年から活躍するピアノ(佐伯文化会館)



平成14年に閉店した寿屋

時を超えて

平成31年4月30日、昭和を引き継いだ平成の世は、約30年の歴史を刻み、新しい時代へと進んでいきます。そして、佐伯市の歴史の一角を支えた大手前も、大きな変革を遂げ、次の時代の中で、新しい形のまちの賑わいを創出していきます。



世界の演奏を間近で

ジョイントリサイタルの様子

交流の懸け橋へ

当日は、さいき城山桜ホールの大ホールが持つ可変性を一足先に体感できるよう、通常の演奏会とは異なり円形の客席の中心にピアノが置かれ、来場者は、ピアノの美しい指の動きや旋律、声楽家の強く優しい庄巻の歌声を間近で楽しみました。また、日本と韓国の曲を会場のみならず一緒に歌う国際交流の一幕もありました。

多彩な利用機能

さいき城山桜ホールの多目的ホール(大)は、音楽に最適なシューボックス形式、講演会・演劇などに利用できる舞台形式、展示・軽スポーツも可能な平土間形式など、利用目的に応じてダイナミックに変化する方式を採用し、あらゆる用途で高レベルの演出空間を提供します。

編集後記

大手前新聞第1号の発行は、2018年7月1日でした。その目的は、市民の皆様へ大手前開発事業のことを、より知っていただくことです。2013年から始動した現計画は着実に歩を進め、2018年3月、大手前まちづくり交流館(仮称)建設の受注者も決まり、いよいよ工事が始まりました。また、同年4月には市道新設工事を終え、大手前は新バスルートへと移行したのでした。ここまで、様々な紆余曲折があった大手前開発ですが、「や」と実現に向け動き出したな」と実感したこと

2016年度は、大手前開発係が現在の大手前開発推進室に昇格した年であり、私が配属された年でもあります。事業着手に伴い、市民説明会に奔走したことが思い出されます。市民説明会では、それぞれの会場でいろいろな意見や要望をいただき、それらを全て持ち帰り、一つひとつ解決に向け真剣に議論してきました。そのような経過を踏んできた当室としては、事業が完成に向け大きく前進した2018年4月、改めて市民の皆様へ事業への理解を深めていただくとうと新聞の発行を企画したのでした。新聞名は「大手前新聞」に決まりました。毎月発行日が近くなること、当室では、皆が慣れない紙面づくりに四苦八苦する光景が恒例となつていきます。紙面づくりのモットーは、「読みやすく」そして「わかりやすく」です。

今後、事業が最後まで順調に進み、万雷の拍手の中こけら落としの幕が上がるのを夢見て、本号を最後に、初代編集責任者としての務めを終えます。

2019年3月
室長 宮脇 洋尚

